

1 あんのう せいいち 安納 成一 (栃木県宇都宮市)

品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
北陸193号	3.8ha	901kg/10a	349kg/10a(552kg/10a) <sup>*</sup>

※作況補正後の地域の平均単収

**【経営概況】**  
 ○ 家族2人(本人、息子)  
 ○ 水稻専業、経営面積約9.7ha

**【作付品目】**  
 ○ 主食用米: コシヒカリ 1.7ha  
                   とちぎの星 3.8ha  
 ○ 飼料用米: 北陸193号 3.8ha



**【取組のきっかけ】**  
 ○ 飼料用米は、需給調整の取組として地域で推進しており、農地集約による規模の拡大と収入の安定化が図られるため、取り組んだ。  
 ○ 品種については、倒伏耐性が強く多収であること、交付金を最大限生かせる多収性専用品種である「北陸193号」を採用し4年連続で作付けしている。



**【取組概要】**  
 ○ 種子の休眠が深く苗立ちが悪いため、播種前(2月上旬)に加温機により目覚ましを実施(約50°Cで6日間)。  
 ○ 育苗は、1箱当たり播種量を慣行150gから300gとする密苗栽培で、10a当たりの苗箱使用数を15箱から8箱に減少。また、植付密度を地域の慣行60株/坪から50株/坪、一部を試験的に42株/坪で田植えを実施。これらの結果、育苗、田植え作業の約3割の労働力削減が図られた。  
 ○ 元肥として、石灰窒素20kg/10aを施用、田植え時に高度一発55を40kg/10a(窒素成分10kg/10a)を側条施肥し、出穂前(7/20~7/25)にNK202を10kg/10a(窒素成分2kg/10a)を追肥。また、田植え時に、施肥と合わせて殺虫・殺菌剤(箱処理剤(箱大臣))を同時に側条施用。  
 ○ 農研機構等の情報を参考に、初期生育期間を長く確保するため田植え時期を前年までの5月下旬より2週間早めの5月上旬までに行った。  
 ○ 圃場の一部で水位センサーを導入し、見回りによる水位確認の労働力低減が図られた。

2 ながめま やすお 長沼 靖夫 (山口県山口市)

品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
北陸193号	約1.0ha	818kg/10a	290kg/10a(528kg/10a) <sup>*</sup>

※作精調整後の地域の平均単収

**【経営概況】**  
 ○ 家族経営(本人と配偶者)  
 ○ 近隣の飼料用米生産者との共同出資で飼料用米専用乾燥機等を設置、共同利用による経費節減を図る。

**【作付品目】**  
 ○ 主食用米  
                   コシヒカリ 0.8ha  
 ○ 飼料用米  
                   北陸193号、夢あおば(種子用) 1.2ha



**【取組のきっかけ】**  
 ○ 実需者と飼料用米生産者の耕畜連携(資源循環型サイクル)を基本とした取組に共感し、平成22年産から飼料用米生産に取り組む。

**【取組概要】**  
 ○ 平成22年産から、多収性で耐倒伏性に優れる「北陸193号」で取り組んでおり、主食用米との作期分散が図られている。飼料用米専用乾燥機を使用することで、コンタミ防止を徹底している。「北陸193号」は、籾の脱粒性が高いため、圃場の落水から稲刈までの期間を短くして脱粒を防ぐとともに、主食用品種に比べて株張りが良すぎて草茎が固いため、高い部分を低速で刈り取ることで、収量アップと収穫時のコンバイン負荷の軽減に繋がった。  
 ○ 生産コスト低減を図るため、①植栽密度を地域の慣行60株/坪から50株/坪に減らす疎植栽培により、資材費、労働力を低減、②実需者から鶏糞堆肥の無償供給を受ける耕畜連携の取組で地力アップに努めるとともに、基肥・追肥に安価な単肥(塩安)を使用することによって肥料費を低減、③除草剤の移植時同時散布により労働力を軽減、④実需者へフレコン出荷することで包装容器代及び運搬経費の削減、等の取組を実施。  
 ○ 実需者や当該実需者に出荷する他の飼料用米生産者と連携し、生育診断等を実施する現地圃場視察会等を行うことにより、生産者同士が切磋琢磨し、単収向上を目指している。